

「いただきます」と「ごちそうさま」

給食が始まると、あちらこちらから「いただきます」「ごちそうさま」の元気な声が教室や給食室から聞こえてきます。「いただきます」の意味はよく知られていて、子どもたちにも教えたりすることがあるかも知れませんが、「ごちそうさま」はどうでしょうか。よく知らないという子どもたちも案外多いかと思えます。そこで、今回は「いただきます」と「ごちそうさま」のを一対の言葉として捉え、その意味を述べていきます。

「いただきます」(頂きます)の意

「頂きます」とは、「私の命のために動植物の命を頂きます」の意味から由来していることは周知の通りですが、そこには大きく深い想いが潜在しています。「いただく(頂く)」は「もらう」の謙譲語ですね。自分にはもったいないような物をもらうので、頭上に捧げ持って「頂く」わけですね。

命を育むものは自然の恵みです。人や動植物は太古から自然の恵みをもって生きてきました。そして、子孫に受け継ぐ命のリレーによって今に至っています。

また、命を頂くのは、人間に限らず肉食、草食動物ももちろんです。植物は大地の栄養によって育ちますが、そこには虫の遺骸や腐葉などの命(バクテリアによって分解されたもの)が詰まっています。生きとしけるものすべてに命がつながり合ってみな生きています(生かされている)わけですね。したがって「いただきます」は命の「連続性」と「連鎖性」を含んだ偉大な自然への感謝、慈しみを表したものです。



「ごちそうさま」(御馳走様)の意

ご馳走の「馳走」は、本来、「馳せ走る」つまり走り回ることです。昔は自給または自足で食材を手に入れるのが普通でした。店など殆どなく輸送手段にも乏しい状況の中、欲しいものが簡単には手に入りませんでした。産地に出向いて分けてもらわなければならないものもあり、農産物に加えて山海の産物を集めるとなると、それは大変なことでした。このように食材の調達には、多くの時間と手間がかかりました。

「馳走」とは獲物や収穫物(食材)を得るために走り回ることの意ですが、さらに客の食事を用意するために奔走し、もてなすことも含まれるようになりました。このような労をねぎらい感謝する意味で、御と様の付いた「御馳走様」は、食後の挨拶語として使われるようになったのです。



一対のあいさつとして

「いただきます」と「ごちそうさま」は一対のあいさつとして捉えると、下記のように様々な特徴が浮かんできます。

「いただきます」	「ごちそうさま」
食べ始め	食べ終わり
命をいただく	馳せ走る
各食材に関する感謝（ <u>もの</u> の命）	食に関わった人々への感謝（人の労）
謙譲語（自分がへりくだる 敬虔）	丁寧語（相手を大切にする）



豊かさや奥深さ、繊細さ

私たちの生活で「いただきます」「ごちそうさま」が一切ない生活は考えにくいですが、外国では食事時のあいさつが存在しない場合もあります。また、「いただきます」「ごちそうさま」のように国民の誰もが自然に行うもので、これほどの奥深さや繊細さをもつあいさつ言葉は他国に類を見ないと思います。

「ものの命」と「人の労」、「謙譲」と「丁寧」、「始め」と「終わり」、「頂く」と「馳走する」…「いただきます」「ごちそうさま」を一対で捉えた時、「日本語の美しさ、豊かさ」と「日本の食文化の素晴らしさ」がさらに明確になります。

昔のように自給や自足せずとも簡単に便利に豊富な食材が手に入る昨今、自然の恵みや人の労を直に感じることは少なくなっています。それとともに「いただきます」「ごちそうさま」の重みや奥深さをなかなか実感しにくい状況にあるのは、現代に生きる多くの人々にあてはまるどころです。私達もまた例外ではなく…だからこそ、毎日の「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつが余計に大事なのかも知れません。

時代の移り変わりや社会的背景の変化とともに、言葉も変わっていくものも多いですが、「いただきます」「ごちそうさま」は、江戸時代から今日に至り、そして未来に向けて伝わり受け継がれていくものと考えます。毎日、元気よく響く子どもたちの「いただきます」「ごちそうさま」の声…それは豊かで繊細な日本の文化と気持ちの継承でもあるのです。

私達が何気なく日常的に使っている言葉にも、知っているようで知らない、知っているがまだまだ知り足りないものがあります。「いただきます」「ごちそうさま」…一つひとつの言葉の深さを感じ取る時、また新たな世界が広がっていくかも知れませんね。

参考文献：テストの花道（NHK番組） 語源由来辞典（ルックバイス）